たものは、それぞれ約50%、約95%に認められた。

以上 dysplasia の組織構築に関する成績は、この病変が頸癌発生に直接する前段階病変であることを示す成績であるといえる。

質問 (長崎大) 山辺 徹

1) Bicentric な上皮内癌の存在を発生的にどのように考えておられますか。

2) 扁平上皮域における dysplasia の運命について、ご意見をお聞かせ下さい。

答弁 (東北大) 矢嶋 聰

1) Dysplasia の field の中で癌化が起るとすれば、これは focus が1ヶ所でもよいと考えています。

2) 成熟型異型上皮は多くは消失すると思われる。癌化したものは成熟型扁平上皮癌になると考えている。

質問 (岡山大) 新 太喜治

1) 解剖学的場所の違いにより分化のパターンが異なるということがわかりましたが、頸管内にできたものは腺癌であつたというような症例はありませんでしたか。

2) Unicentric というのは unicellular origin と考えておられるのでしょうか。

答弁 (慶応大) 筒井 章夫

われわれのところでは腺癌であつた経験はございません。

答弁 (東北大) 矢嶋 聰

その点についての検討成績はもっていないのでわかりません。

5, 6に対する質問 (長崎大) 中山 正博

異形成および上皮内癌の病巣復構にあつて、病巣と隣接上皮との境界を決める際にかなり困難な場合がある。とくに異形成の場合、円柱上皮との境界は比較的決めやすいが、正常の扁平上皮と異型成との境界は clear cut に決めがたいことが多い。この点二人の先生のお考えをお聞かせ願いたい。

答弁 (慶応大) 筒井 章夫

われわれも Dysplasia とその外側の扁平上皮との境界部位を決定することが困難な症例の多いことを経験しております。

答弁 (東北大) 矢嶋 聰

私どもはC I Sの基準を定めて観察しているが、それでも dysplasia とC I Sの移行が gradual で判然とした例は多い。

5, 6に対する質問

(大阪府立成人病センター) 野田 定

只今の御説明で dysplasia からC I Sをへて、invasive cancer に progress する説明はよくわかつたのですが、逆に regress する case では、progress する case との間に何か病巣のひろがり方とか、組織基準の上で差異はみとめられなかつたでしょうか。又、長い human life の上で、その人生の一時期だけの所見をとらえて、その prognose を類推することが果して出来るのでしょうか。又、夫々の先生の示されました cases の組織所見とその致命率といったもの間に、何か特別な関係をみとめられましたでしょうか。

答弁 (慶応大) 筒井 章夫

Progress したものと regress したものと病巣の拡がりの差異の細かいデータは出してありませんが感じとしては変わらないように思います。われわれは follow up する場合は細胞診と陰拡大鏡診によつておりますが regress した症例でも陰拡大鏡診所見の異常所見も消失して良性所見のみになつたものは数例にすぎず大部分はそのままの形で異常所見の残存を認めております。

答弁 (東北大) 矢嶋 聰

Smear では、regress したものの成績をもっているが、組織学的に regression の病巣の縮少を連続的に観察した成績はありません。

答弁 (慶応大) 栗原 操寿

○野田先生(大阪成人病センター)に対する返答
消失する Dysplasia の正確な組織学的分析は病変が消えてしまうので不可能ですが、Colposcopy の異常所見の分布や占処の状態から推察しますと、消失するDysplasia と癌化に向う Dysplasia との組織学的占処は全く同じであると見做されます。

○山辺先生(長崎医大)に対する返答

Ectocervix を占める病変は Endocervix のものよりもより分化しているのが普通であります。したがって、Ectocervix を占める Dysplasia が若しも癌化に向えば、分化型の上皮内癌になり、さらには分化の高い扁平上皮癌になります。

7. 子宮頸部上皮の悪性化における蛋白合成の態度 (神戸大)

岩崎 正憲, 松浦 役児, 三浦 徹

長谷川和男, 東條 伸平

我々はすでに子宮頸部上皮の癌化過程に於てDNA合成からみた細胞増殖動態の検討を行い報告した。今回はこれらの観点に立脚してRNA及び蛋白合成の態度について検討した。方法は頸部ビラン及び頸癌患者より採

取した小組織片を Uridine-³H, Leucine-³H 及び Proline-³H (4 μ Ci/ml) を加えた各培養液に浸し, CO₂-incubator 内で培養後, 経時的にとり出し autoradiography を施し, 各病像について間質との位置的關係から normal 及び dysplasia では superficial layer と basal layer に, carcinoma では inner layer と outer layer に区分し, 領域別に検討した. Uridine-³H autoradiograph では RNA は各病像とも核小体から細胞質内へほぼ等しい時間経過で移行する. 区域別に mean grain count (MG) をみると normal では superficial 及び basal layer の MG はほぼ等しく Dysplasia では basal layer で低下し, carcinoma では inner layer で低下していた.

Leucine-³H 及び Proline-³H autoradiograph についてみると, normal では superficial layer の MG が basal layer のそれに比して約2倍の値を示し, carcinoma では outer layer の MG が inner layer の約2~3倍の値を呈した. 両アミノ酸構成比 L/P を求めると normal と carcinoma の間には差異は認められないが領域別では superficial 及び inner layer の如き間質からの遠位域では0.93であるのに比して basal 及び outer layer の間質からの近位域では1.12~1.13と高値を示した.

以上の結果をすでに報告した DNA 合成の成績を加味して考察すると, Normal では間質からの近位域で GF は高率で DNA の亢進がみられるが RNA 合成は全域に亘つて亢進し, 蛋白合成は遠位域で促進する. すなわち DNA 合成領域と蛋白合成領域の解離が示され扁平上皮における分化が示唆された. Carcinoma では間質の遠位域で DNA のみならず RNA 及び蛋白合成共に低下し, DNA 及び RNA 合成領域の解離がみられず悪性化に伴う分化への障害が提起された.

質問 (大阪市立大) 須川 侑

頸癌上皮の詳細な細胞生物学的検討を加えられたことに敬意を表します. 2つの点に質問致します.

1. RNA 合成を H³-ウリヂンを用いた Autoradiography でみられ, 時間の推移にともない, 合成される RNA が核より細胞質への移行を示差されましたが, 理論的にも間違いのない解釈と存じます. しかし, autoradiogram 上で grain の数をもつて数量的な表現をとられるとき, 薄切片とは云え, やはり立体的なものゆえ, 核に乗った grain は必ずしも核内 RNA とは申せないのではないのでしょうか.

2. プロリン, ロイシンを precursor として用いられた場合, それが蛋白質へ incorporate されていると決定

出来る根拠つまり, 実験方法を御教え下さい.

答弁 (神戸大) 岩崎 正憲

1) Uridine-³H はほぼ大半が RNA に取り込まれることは諸家の報告が多くあります. 我々はこの観点から, autoradiograph を用いて Uridine-³H の grain の intranuclear から extranuclear への移行を観察したのですが, 確かにこれだけで数値化することはその手技上の問題も加味されてくる故今後検討しなければならないと考えております.

質問 (大阪大) 三浦 捷一

Mean Grain Count を, 核酸合成及び蛋白合成の指標とされていますが, autoradiography の場合, free の substrate (labelled) の量が不明である為, 細胞内の substrate の poolsize, labelled precursor の specific activity が不明である.

御報告によると, normal, cancer で, 蛋白合成, 核酸合成に余り差がない様に見うけられるが, 癌細胞では, 明らかにこれらが亢進しているであろう事から考えても, 組織内浸透の問題のみならず, endogenous な substrate の量が, 大きな問題であると考えますが, この点に関する検討, 又は御見解があれば御教示下さい.

答弁 (神戸大) 松浦 役児

薄切片の厚さは4 μ としていますので, Mean grain count はほぼ培養時間中に行われた合成量と考えてよい, その他種々の問題については現在検討中であり, 割愛した.

討論 (神戸大) 松浦 役児

1) われわれの意図するところは組織構成の中で検討しようとしている. 勿論組織切片から RNA の核から核外への移行を Urd-³H grain の移行から, 厳密な意味で核 RNA 及び核外 RNA ときめつけることはできない. そこで標本の核上に検出された grain を intranuclear grain 核外で検出された grain を extranuclear pair として RNA の移行動態の指標として観察した.

2) 標識アミノ酸とり込みにみられる蛋白合成の解析には先生の御指摘の方法に準じて行なつた.

8. 担癌個体(頸癌)における免疫能(リンパ球と血清因子の解析)

(大阪市立大)

梅咲 直彦, 植田 勝間, 山片 重房
海野 隆彦, 中森 宏, 迫 久男
須川 侑

頸癌に対する宿主側の防禦機構として免疫監視機構が